

「腸」表現による中国古典詩分析の試み

——概論と演習方法——

市川 桃子

二〇〇六・七年度に、三つの大学の演習で、身体感覚に由来する感情語である「斷腸」などの「腸」語を含む感情表現を取り上げ、多くの受講生と共に各詩人の特徴を見た。その演習による各論については、次の会報に報告されている。

『中唐文學會報』第一四号 二〇〇七年一〇月（五一—一六九頁）

また、二〇〇八年八月現在、二〇〇六年度に杏林大学で行われた中唐文学会大会での報告資料が次のブログに公開されている。

中唐文学会公式ブログ（二〇〇六・七年度）資料「詩人の個性―感情語『腸』による分析―」チーム市川

<http://zlw.secsa.net/archives/200610-1.html>

本稿では、先秦詩から唐詩までの世界を俯瞰する形で、唐詩を中心として概論を述べ、さらに、授業報告の形で、二〇〇六・七年度にどのように演習を行ったかを記す。各論と併せて読んでいただければ幸いである。⁽¹⁾

一、概論

「腸」語の初出は早く、淵源は『詩經』まで遡ることができる。「迴腸」「腸中車輪轉」といった回腸系の語は漢代か

ら見られる。「斷腸」というと、『世説新語』に載る猿の母子の話が有名であるが、「斷腸」「切腸」といった「断腸」系の詩語は魏から出現し、六朝時代には、悲哀を表す抽象的な意味を持つようになる。このほかに、唐代以降に長く詩語として使われる「愁腸」、「傷腸」の語も、魏に見られる。漢魏には、「腸憤悵」「驕腸」といった怒りや驕りの表現、「樂腹腸」といった喜びの表現もある。こうした表現は、六朝詩にはない。これらを踏まえて、唐代の様相を分析すると、おおよそ次のようであった。

本章末にある表1は、今回調査した詩人の「腸」語を含む詩句の数を並べたものである。このグラフを見ると、白居易や李白、孟郊が多く句を作っているように見える。しかし、白居易は作品数が多いので、その為に「腸」語を含む詩句も多いのかもしれない。このグラフだけでは比較できない。表2のグラフは、「腸」語を使った詩句が、それぞれの詩人の作品に占める割合を示したものである。表1にある「腸」語を含む詩句を各詩人の詩句総数で割り、さらに1000を乗じた。詩句総数に占める「腸」語の割合はごく小さいので、統計的な意味は不確かなものかもしれない。しかし、王維と孟郊や韋莊を比較してみると、やはりそれぞれの傾向が反映していると考えられる。

このグラフはおおよそ詩人の生年による年代順に並んでいるように見えるが、前後している者もある。各詩人の作品を分析した結果、王維から劉禹錫までと、韋応物から孟郊まで、また元稹から韋莊までの、三グループに分けて考えることとした。このグラフの内、第一のグループは全体に低調で、グラフの長さが不定である。それに対して、第二第三のグループは、右肩上がりになっている。第一のグループは、作品の相互に影響関係が認められないと思う。それに対して、第二第三のグループは、作品の相互に影響関係が認められると思う。そうしたことが、このグラフにも関連させて考えられるのである。

次に、表3で、「腸」語の用法を見る。「感情語」とは「斷腸の思い」のように感情を表す言葉である。「性格」には「剛腸」のような例がある。「臍物」は文字通り「はらわた」。「路の比喻」とは全て「羊腸」という語である。「その他」

は「心」「志」のような、上記の分類に当てはまらない意味を持つものと、「魚腸劍」などの名称である。なお、王維は「腸」語を含む詩句が二句しかなく、このグラフに載せる意味が小さいので、省略してある。

表3を、各詩人の作品に占める割合で見ると表4のようなグラフになる。

岑参、李商隠、韋莊は感情を表すときにしか「腸」語を使わないが、韓愈には臍物である「はらわた」の表現が多い。劉禹錫は感情語が多いように見えるが、感情語が性格と重ねて用いられていることが多く、岑参等と同じようには論じられない。

では感情表現にはどのような言葉が多く使われているのだろうか。表5に各詩人の用法をまとめる。それを各詩人の作品に占める割合で見ると表6のようになる。岑参は「斷腸」語しか使わない。韓愈は「斷腸」語を使わない。李白、白居易、岑参と、元稹、杜牧、李商隠、温庭筠、韋莊に「斷腸」が多いことに気づく。それに対して、韋応物から孟郊までは、「斷腸」語をあまり用いない。また、中頃にある、韓愈、李賀、孟郊には「その他」の部分が多く、彼らが六朝以来の定型的な語をあまり使わないことがわかる。

「腸」語を含む表現は、大きくは、悲哀などの言葉とほぼ同義の抽象的な感情表現と、悲しみの余り腸がのたうち外に出てうねる、というような、いわば比喩的で具象的な感情表現との二つに分かれる。この表現が表す感情は悲哀が多いが、切なさ、怒り、恨み、鬱憤もあり、例は少ないが歓喜や興奮もある。

抽象的な表現を取るのは、王維、岑参、李白、杜甫、白居易、劉禹錫を経て、元稹、李商隠、韋莊、杜牧、温庭筠へと続く人々である。このラインは元稹以降、変化を見せる。

具象的な表現を取るのは、韋応物からはじまり、柳宗元、韓愈、李賀、孟郊へと続く。唐代で見る限りでは、この表現は孟郊までで、断ち切られたように終わる。晩唐の主要な詩人たちには見られない。

表7は、その関係を、詩人の生卒年との関わりから見たものである。今回、調査した各詩人の作品分析と、演習で

行った各論とを考え合わせて考察した結果、「腸」表現に関して見る限りにおいて、ピンクで記した、王維から劉禹錫と、青で記した韋応物から孟郊まで、さらに、緑で記した元稹から温庭筠までの三つのグループに分けられると考える。なお、今回述べた概論の論証については、各論と併せる形で述べる機会を別に持たたい。

北宋の詩人についても触れておこう。調査した詩人の数が少ないので、全体的な傾向を見ることはできなかった。しかし、少ない例を見ても、興味深い結果が得られた。たとえば、欧陽修、蘇軾は「断腸」語を多用し、唐代における第一のグループに傾向が似る。それに対して、王安石詩にはうねうねと山を巡り、湖海をぐるぐると回る未練の腸が描かれている。

〔送張拱微出都〕

腸胃繞鍾山 腸胃は鍾山を繞り

形骸空此留 形骸空しく此に留まる

〔次韵奉酬覺之〕

山林病骨煩三顧 山林病骨三顧に煩ひ

湖海離腸欲萬周 湖海離腸萬周せんと欲す

かく、王安石はあきらかに唐代の第二のグループを繼ぐ者で、それも孟郊のかなり過激な表現をさらに極めるものである。

今回行ったような、詩語による唐代の作品分析をきちんと行えば、それと比較する形で、宋代の詩人論を述べるといふ研究方法も有効であろう。

表1 腸の句数

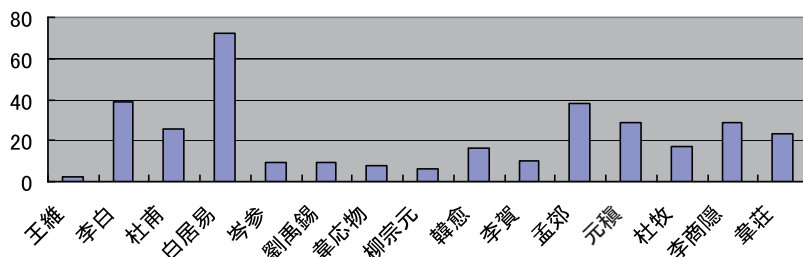


表2 腸の句/詩句総数 * 10000

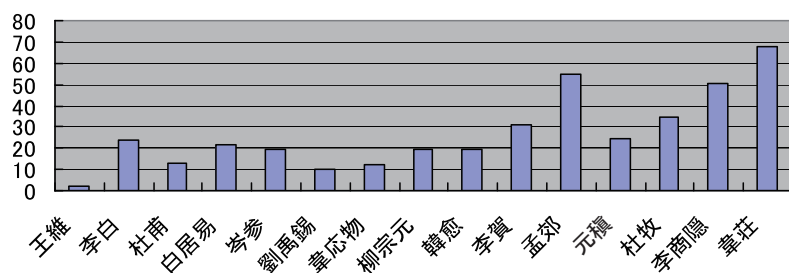


表3 「腸」語の内訳

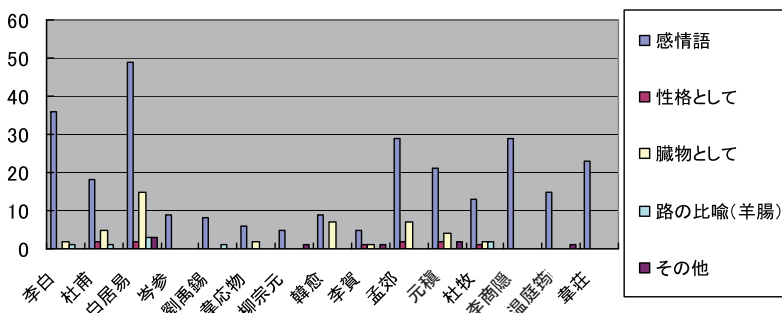


表4 「腸」語の内訳・積み上げグラフ

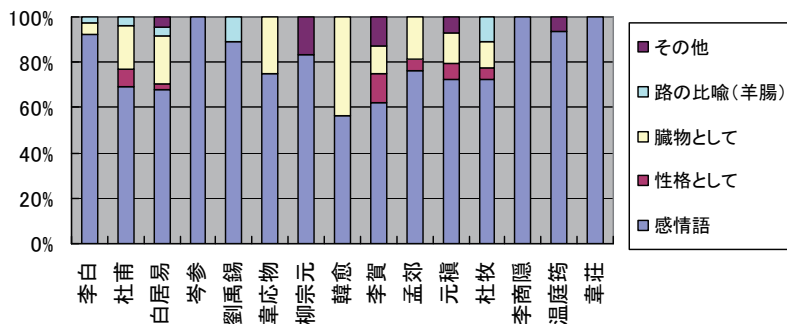


表5 感情語の内訳

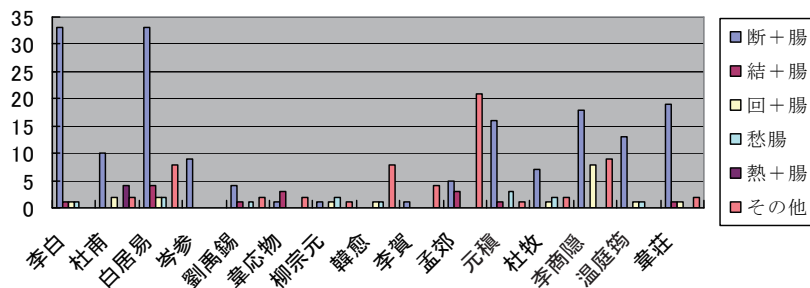
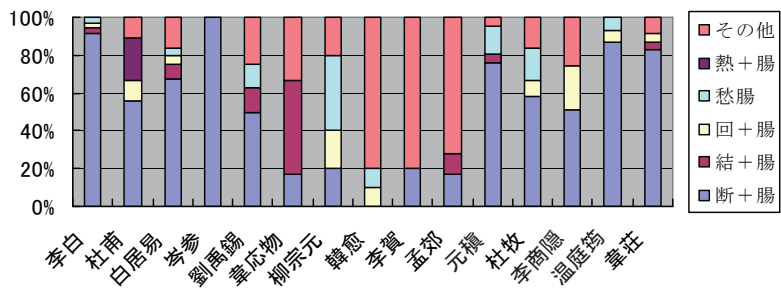
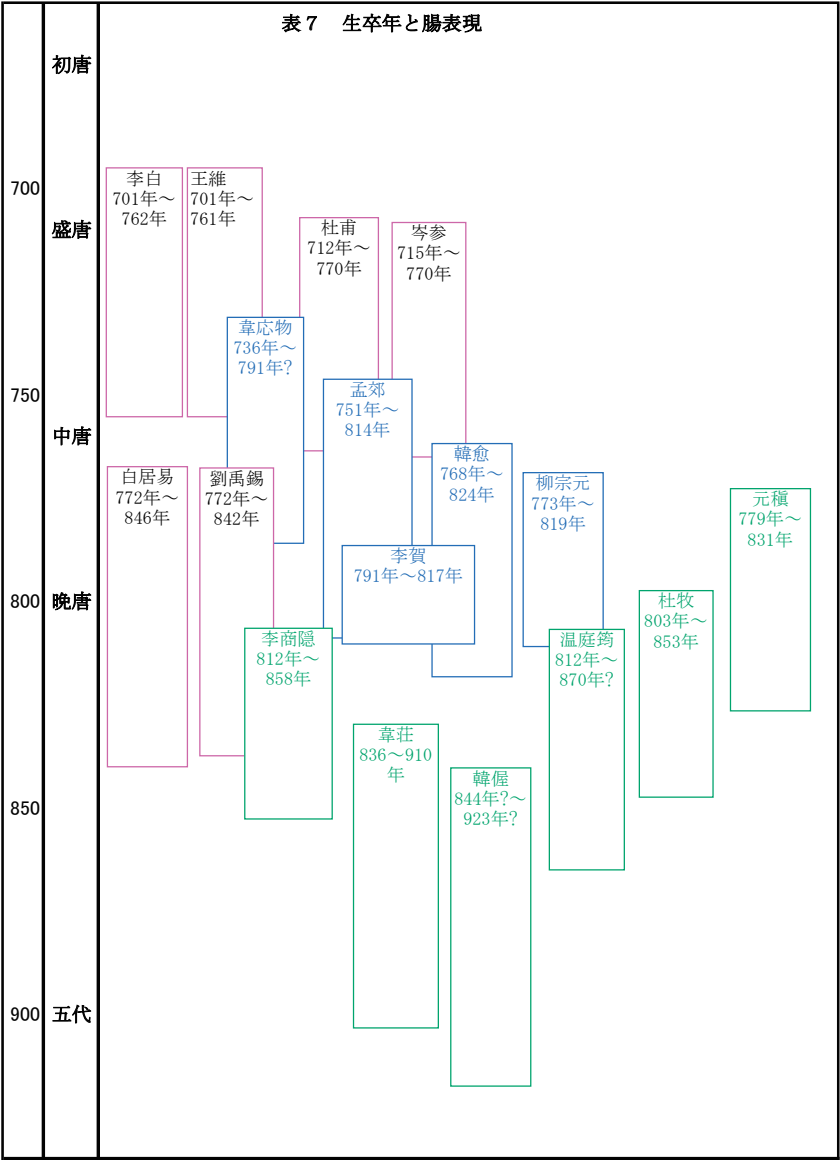


表6 感情語の内訳・積み上げグラフ





二、演習の方法

二〇〇六年度から二〇〇七年度にかけて、三つの大学で演習を担当する機会を得た。そこで、共通の主題として、中国古典詩に於ける「腸」表現を取り上げ、明海大学では先秦から六朝を、東京大学では唐代を、東北大学では宋代を、受講生と共に調査した。明海大学と東京大学では通年で一年間の、東北大学では五日間の集中講義であった。

先秦から六朝時代までは、受講生が自ら工夫して、経時的に統一した表を作った。表にある項目は、① 詩題 ② 作者 ③ 詩句原文 ④ 詩意 ⑤ 腸の用例 ⑥ 腸の分類 ⑦ 感情の主体 ⑧ 誘因 ⑨ 感情 ⑩ 備考 ⑪ 書名と頁 である。資料は遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』を基本とし、先秦については十三経及び史書などの、漢詩以降については『文選』『古詩源』『玉臺新詠』などの資料を参照した。

唐代と宋代については、授業の初めに次のような要領を配布した。

- ① 担当する詩人を決める。
- ② 唐代については寒泉で「腸」語を含む詩句をダウンロードする。(宋代については『全宋詩検索系統』³⁾で検索する。)さらに別集などで校勘をする。
- ③ 作品を読む。作者がどのような時にどのような思いを表現するために「腸」表現を使うか、について考える。
- ④ レジュメを作って報告をする。作品が少ない場合は授業時に全てを報告する。作品が多い場合は、重要だと思う作品を報告する。
- ⑤ レジュメの作り方は以下の通り。報告者の名前、報告年月日、作品(詩題 本文 訓読 校勘 意味 コメント)、「腸」表現についての意見
- ⑥ 期末レポートは以下の通り。主題は「担当詩人の腸表現について」。主要な作品の解釈を含むこと。小論文として「序論、本論、結論」の結構を持つていること。主題は一つに限ること。

この演習に参加してレポートを提出した者とその分担及び主題は次の通りである。なお、所属は明海大学と東京大学については二〇〇六年度、東北大学については二〇〇七年度のものである。

【先秦漢魏晉南北朝】

先秦漢魏 — 初出の搜索 —

明海大学応用言語研究科 博士課程後期

柴田知津子

晋 — 定着に向かつて —

明海大学応用言語研究科 博士課程前期

陳納新

宋 — 定着に向かつて —

明海大学応用言語研究科 博士課程後期

劉道明

齊 — 抽象化に向かつて —

明海大学応用言語研究科 博士課程前期

劉道明

梁 — 抽象化の道程 —

明海大学応用言語研究科 博士課程前期

柳宇星

陳 — 抽象化の帰結 —

明海大学応用言語研究科 博士課程前期

李香蘭

【唐】

盛唐・杜甫 — 個人に優先する公的憤慨 —

東京大学大学院 アジア文化研究専攻

博士課程 遠藤星希

中唐・白居易 — 親しい者への哀惜 —

東京大学大学院 アジア文化研究専攻

修士課程 加納留美子

中唐・韋応物 — 「結中腸」から窺える内臓感覚への回帰を中心として —

東京大学大学院 アジア文化研究専攻

博士課程 遠藤星希

中唐・柳宗元 — 具体的イメージとしての「腸」 —

東京大学文学部言語文化学科中国語中国文学

専修課程 藤田玲

中唐・韓愈 — 感情が在り置かれ入り生まれる空間 —

東京大学大学院 アジア文化研究専攻

博士課程 田中智行

中唐・李賀 — 内臓感覚への立ち返りを求める言葉 —

東京大学大学院 アジア文化研究専攻

博士課程 高芝麻子

中唐・孟郊 — 視覚化される感情 —

東京大学大学院 アジア文化研究専攻

博士課程 田中智行

中唐・劉禹錫 — 性格表現と感情表現の接近 — 東京大学文学部言語文化学科中国語中国文学 専修課程 武井遥香
 盛唐・李白 — 「喪失」に応ずる「腸」 — 東京大学大学院 アジア文化研究専攻 博士課程 山崎 藍
 盛唐・岑参 — 全てが「斷腸」 — 東京大学文学部言語文化学科中国語中国文学 専修課程 武井遥香
 晚唐・杜牧 — 他者と共有せず、動植物と共有する感情 — 東京大学社会文化研究専攻社会学 博士課程 欧陽宇亮

晚唐・李商隱 — 内臓感覚の捨象された「腸」 —

晚唐・韋莊 — 内向する甘美な苦痛 — 東京大学大学院 アジア文化研究専攻 博士課程 高芝麻子
 中唐・元稹 — 切り取られた悲哀の瞬間 — 東京大学大学院 アジア文化研究専攻 博士課程 高芝麻子
 晚唐・温庭筠 詩詞 — 美意識を喚起する要素 — 東京大学大学院 社会文化研究専攻 博士課程 欧陽宇亮

【宋】

北宋・欧陽修 — 「断+〇〇+腸」 — 東北大学大学院文学研究科中国語学中国文学専攻博士課程 菅原尚樹
 北宋・梅堯臣 — 様々な表現の追求 — 東北大学文学部人文社会科学科中国文学専修 薪塩 悠
 北宋・黄庭堅 — 感情を揺さぶる音 — 東北大学大学院文学研究科中国語学中国文学専攻修士課程 平間雪絵
 北宋・陳与義 — 詩作に関わる腸 — 東北大学大学院文学研究科中国語学中国文学専攻博士課程 田島花野

注

(1) 「腸」語を含む詩句には、「はらわた」そのものを述べるものもあるが、今回はそのような表現は扱わない。感情表現に限る。

また、「剛腸」語のように、性格を述べる言葉もあるが、これについては、必要に応じて考察に含めた。

(2) 詩句総数は中華書局『全唐詩索引』による。

(3) 北京大学数拠分析研究中心 北京大学出版社